

現在は、グローバル化した世界である。一つの国の出来事が、すぐに、周りの国々、世界に影響を及ぼす世界になったということである。余剰する国から不足する国に送れば、互いに満たされ、平和が保てる。ところが、全く真逆のことが起こった。ロシアのウクライナ侵攻は、21世紀に起こるとはと、驚愕するような出来事であるが、この侵攻によって、アフリカでは小麦の輸入が困難になり、餓死者が出るような状態を生み出し、ヨーロッパではガス供給が得られず大騒ぎになり、日本でも、物価の上昇が止まらない。ロシア・ウクライナ戦争は、日々、無残な戦争犠牲者が出ているというだけでなく、世界を巻き込む苦難と悲しみを増幅している。グローバル化により、国際報道に関心を持たざるを得なくなった。ところが、フェイクニュースやプロパガンダに振り回され、国際報道をどのように受け止めれば、状況を正しく理解できるのかが分からない状態になっている。

共同通信の記者として多くの国際報道に関わり、現在も、特別編集、論説委員の立場にある杉田弘毅氏が『国際報道を問いなおす ウクライナ戦争とメディアの使命』を著している。著者によれば、日本の国際報道は米国メディアの記事を翻訳し、「横のもの（外国語）を縦（日本語）にする」だけであると批判している。しかし、ベトナム戦争や中東の紛争、米国の報道、ロシアや中国の思想戦などを、多岐にわたって論述し、その中で、命を賭して情報の入手に挑んでいるニュース記者たちがいることを書いている。出来事の真偽を見分けるために、大変な危険の中、労苦を惜しまず、闘っている彼らに敬服する。

メディアは自由が保障されたところで真価が発揮できる。自由と民主主義を標榜している米国からの報道が、多角的で、かなり情報公開をも可能にしているので、やはり信用が置ける。しかし、イラクに大量破壊兵器（核兵器製造）があるとの報道が流れ、一気にイラク戦争に突入した。しかし事実は、イラクにはそのような物は無かった。偽ニュースによって、幾多の人間が殺される悲劇と、後にイスラム国という野蛮なテロ集団を生んだ。

ウクライナ戦争に突発し、国際報道が過熱したのは当然である。杉田氏は、それには五つの理由があると言う。①迫力ある映像によって、戦場を世界に「可視化」した。戦争は情報戦を伴うが、ウクライナ戦争は、当事国と国際報道だけでなく、市民のSNSによって、悲惨な現実が映し出され、戦争の実態が目の前に展開された。②プーチン大統領の凶暴な侵略はなぜなのかという疑問である。大国ロシアの権力者が独立国家であるウクライナに国連憲章に違反し、戦争犯罪も恐れず、侵攻したことは理解し難い。彼は、米ソ冷戦構造が壊れ、ソ連の敗北を慙愧の思いで受け止め、大国への復活を夢見たのではないか。③米国とロシアの実質的一騎打ち、民主主義陣営と権威主義陣営に二分する世界史的な戦争になった。自国の国益を考え、ロシア支持を表明する国も少なくない。④戦争が長引き、今後、ウクライナ、世界はどうなるかという先行きの見えない不安がある。情報戦は混乱し、出来事の真偽が見えず、戦死者だけが増えて、結末が全く見えない。⑤平和で繁栄している北半球、先進地域の一角で戦争が起こり、市民が悲劇に突き落とされている。アフリカや南米で戦争があっても、当然とは思わないが、世界のどこでも戦争が起こることを予感させている。力による現状変更を起こし兼ねない状況を生んだ訳である。

これらの問いに、答えるメディアを期待し、何より停戦を望む。現在、何の答えも見出せないが、プーチン政権の国民の声を抹殺し、反する者を処罰する恐怖政治だけは、断じて認めることができない。言葉の自由を保障する民主主義は、時間と労力がかかっても、人間の尊厳を守る制度であることに間違いはない。